

[COLUMN]

時差のカラクリと妙味

毎日自転する地球から時差に関するさまざまなドラマが生まれる。24時間で1周（1回転）することは、経度15度につき1時間の時差があるということである。日本は国土が狭く、ほぼ国の中央に近い明石を東経135度の子午線が走っているため、15度差の釧路と福岡でもそれほど不自然には感じない。しかし、国土の広い中国のように、東の北京時間を国の標準時間にすると西域方面では、鶏の朝の挨拶‘コケッコウ’を太陽燦爛の下で耳にする奇妙な現象が起きる。ロシアでは、交通時刻は航空機でも列車でもモスクワ時間に統一されているので、同じ国内を旅行しながら年中時刻計算をしなければならない。世界一早い日の出を、国の観光の売り物にするキリバス共和国のような例もある。

だが、時差には好奇心を掻きたてる意外性に富んだ一面もある。6年前パリ・セーヌ河畔を疾走していた乗用車が交通事故を起こし、乗っていたイギリスのダイアナ妃が、その後収容された病院で亡くなった。時まさにパリ時間の8月31日払暁であった。たまたまカナダのバンクーバーに滞在していた私は、テレビの臨時ニュースでこのビッグニュースを知った。パリ時間午前5時過ぎに伝えられたダイアナ妃事故死のニュースを私が知ったのは、実に前日の30日午後11時過ぎだったのだ。時間的には、私はバンクーバーでダイアナ妃の死の前日に彼女の死を知ったことになる。イギリス皇室はもとより、日本を含む世界中の人々に先駆けて、私は「前日に王妃の死を知った」？のである。

こんな謎めいたことが起きるのも時差の気まぐれのせいである。場所を問わなければ、映画「太陽がいっぱい」でアラン・ドロンが演じたアリバイの偽装工作も成立する可能性がある。これも神がわれわれに与え給うたクイズなのだろうか。